
贅の毎日

ほたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

贄の毎日

【Nコード】

N9822Y

【作者名】

ほたる

【あらすじ】

「贄」となった三人の姫とそれを支える三人の騎士。か弱い姫とルックスバリバリのカッコいい騎士なんて、なんて羨ましい世界。と思いきや、三人の姫はちょっとズレてて、三人の騎士は嫉妬深い性格？

特殊設定の世界で6人が過ごす日々を綴りたいと思います。

初投稿なので見苦しいところもあると思います！また、妄想から生まれた話なのでそういうのがムリ！という方は回れ右でお願いします。

誤字脱字「こつしたほうがいいよ」「アドバイス、お待ちしております。亀更新で、見苦しくても読んでくれるという心の広い方待ってます！」

プロローグ（前書き）

初めて書いたのもうやりたい放題です。

プロローグ

とある国があった。とある国には2つの特色があつて、それは他の国にはないものだった。

1つは「贅」となる姫が存在すること。

「贅」と聞くと「捧げもの」とか「犠牲」などのイメージがあると思うが、ここで言う「贅」は少し違う。「贅」とは産まれたときに体に機能しない器官を作られり、本来つくべき筋力がつかないようにされた者たちのことを言う。そんなことをする理由。それは「贅」からとられた器官や力は生まれてくる男子の筋力となるよう役立てるためだ。

贅になる条件は女性であることのみ。

その条件もあつて、その都度決め方はそれぞれだ。酷い例では籤で決めたというときもあつた。

今の贅となつている3人の姫は、足と、耳、声を使うことが出来ない。

足を使えないものは車椅子に乗り、喉を使えないものと耳の聞こえないものは話す相手の手を握つて意思伝達をするという風に、暮らしになんら支障はない。

2つ目は、生まれたときから人それぞれに婚約者がいること。

人との相性が合おうが合わまいが関係ない。王の御言葉とかなんとか言えば罰があたるだなんだと何も言えなくなるのだ。だが、最初から決まっている相手がいるということ余裕ができたのか、実際国はよく回り男女関係についてのトラブルも聞かない。

この物語はこの世界で「贄」として生きる3人の姫と、それを支える婚約者として生を受けた3人の騎士の日々を綴ったものである。

プロローグ（後書き）

アドバイスおまちします

第一回 騎士舎にて（前書き）

なんだかごちゃまぜだわ・・・

人物紹介、すごい適当ですが入れました。

第一回 騎士舎にて

「この木刀で戦うの？痛そう・・・」
痛そうに顔をしかめる長髪の少女。

『すごい重い・・・』

木刀を両腕に乗つけて感嘆の表情を見せる黒髪の少女。

『シンたちってこれよりも重い棒を使って戦ってたのね・・・知らなかった』

こちらは違う意味でびっくりしたような顔をするショートボブの少女。

クリツとした小さな目に小柄な体。

白いドレスの裾を草むらに広げて座る三人の可愛らしい少女たち。

そしてその中にいるのは。

「いやこれが当たると超イタいんすよ！しかも、相手がレオとかだとこれがもう壮絶で！まあ重みは剣の方が重いんで置いとくとして、シンは・・・サリちゃんにどんな感じで接してるかは後が怖いんで想像に留めておくとして、今日の稽古みたらたぶん印象変わります

よ。」

黒髪の少女とショートボブの少女にそれぞれ両手を握られて鼻の下を伸ばしているひとりの騎士だった。

「でもサリのことだから怖いって思わないでしょーね。むしろカッコいい?」

長髪の少女は頬に指を寄せ、サリと呼ばれた少女を見てしたり顔。

『ええ・・・わ、わかんないよ・・・。怖いって思わないのはホントかも知ないけど・・・もう、ミアのいじわる』

頬を赤らめながら下を向くのはサリと呼ばれたショートボブの少女。

恋する少女の悩ましげな顔は鼻血ものに匹敵する。

ましてやそれが美少女だったなら、その効果が二割り増したとしてもありえない話ではない。

「あたしだけ責めないでよ、ほら見なさいよミアのこの嬉しそうな顔!」

ミアと呼ばれた少女は今度は攻める矛先を変え、黒髪の少女を指差した。

『え、あ、あたし？』

これまで流れに便乗して口元に笑みを浮かべて傍観していたミラと呼ばれた黒髪の少女は、いきなり矛先を自分に向けられ戸惑った。

そんな他愛も無い小競り合いをほほえましげに見守る騎士たちを押しつけて、負のオーラを出す男三人。

「ハイそこそこそこそこ。今に焼けたやつら顔覚えたから、あいつらやるの俺決定ね。」

金髪を輝かせながらも顔は目が据わっている。

「俺も顔覚えた。ミア見て鼻血出した」

茶髪で短髪の男は、長髪を揺らして笑うミアをみた後、一層顔に影を深めながらその周りの微笑んでいる騎士を睨んだ。

嘆息しながら灰黒色の髪の男は立ち上がって木刀をとった。

「じゃあ残り全部は俺が処理していいのか」

事の始まりはいつも城に籠り気味な姫たちが、それぞれの部屋で自分たちに「外に出たい」とねだってきたことだった。

いつもこちらから誘っても人目につくことを避けてかあまり乗り気ではない姫たちが珍しく自分を誘ってきた。これはもう行くしかないだろう、とうきつき気分で腰を上げたのも束の間。

まさか3人で自分たちを誘っているうえ、行き先が騎士舎だとは。

「前から一回行ってみたかったのよね！」

と嬉しそうに笑うのは腰までの髪が美しいミア。足が不自由で車椅子に乗っている。どんなとこなの？と上を向くと、車椅子を押している見事なまでの婚約者の不景気ヅラが見えた。

「何であんなところにわざわざミアと・・・」

と不景気ヅラを浮かべなにやらぶつぶつ呟いている男がミアの婚約者であるカイだ。

茶色い短髪と元気そうな顔立ちが笑えば快活そうな性格を思わせる

が、顔に影が差している今の状態では台無しだ。

『どんなところなんだろうーなあ・・・やっぱり男くさいのかなあ』
わくわくしながら隣にいる金髪の騎士の手を握って歩くボブの髪型をしてるのはサリ。
彼女は耳が聞こえないので、隣にいる婚約者の手から情報を読み取っているのだ。

「お、男くさいって・・・一体どんなのだと思ってんだ」
その横でサリの手を握りながら顔を引きつらせているのは婚約者のシンだ。まばゆい金髪に青っぽい目。まあ、あれだ。要するに金髪碧眼の美青年、というわけだ。天然気味な婚約者のおかげでツッコミにキレがあるが、そんなことは輝くシンの顔を前にすれば気にするほどでもない。

『獣が棲んでるってどういう意味なのか、やっと知れる日がきたわ』
目を輝かせて意気込んでいるのは黒髪のミラ。こちらもサリとシンと同じように、隣の騎士と手をつないでいる。ミラは言葉を話せないので、騎士に思ったことを伝えているのだ。

「まあ、間違っただけじゃないんだ。お前の思っていることは根本的に間違っていると俺は思う」

もう騎士舎に向かうということに関してはあきれ果てて何も感じなくなっている大人なこの騎士が、ミラの婚約者であるレオ。灰黒の髪に長身。よく言えば真面目、悪く言えば地味。顔はスッキリしていて騎士服が見栄えするが、彼にしかない特徴、というのが無いのが欠点。

そうこうしてるうちに、騎士舎につき最初に戻る。

ちなみに三人の姫にノックダウンされた騎士たちは、その婚約者に身体的にノックダウンされましたとさ。

第一回 騎士舎にて（後書き）

すいません、調子乗りました。長すぎて意味わかんないですね。騎士が嫉妬すればいいと思ったのと、どうやって紹介入れればいいのかわかんなかったのが混ざってごちゃ混ぜになりました。反省してますすいません。

書きたいことばかり書いてたら最後までいざっばですが、気にしないでくれると嬉しいです。

アドバイスおまちしてまーす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9822y/>

贅の毎日

2011年11月29日20時48分発行